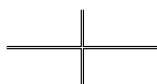


日本オフィス学会「オフィス文化論研究部会」
株式会社オフィスビル総合研究所「和魂洋才のオフィス研究会」
合同講演会
講演録



「感性の哲学」

コミュニケーション空間のデザイン技法

哲学者

桑子敏雄 氏

東京工業大学大学院 社会理工学研究科 教授

「21世紀は感性の時代と言われる。経済合理性や
効率といった価値によってすべてのものを測ろう
とした21世紀が終わり、新しい世紀が始まった。
これからの新しい価値観は、感性にもとづいて形
成されることになるだろう。・・・」

「感性の哲学」 桑子敏雄著 はじめにより

株式会社 **オフィスビル総合研究所**

January/2005 Commercial Property Research Institute, Inc.



講演中の桑子先生

桑子先生プロフィール

1951 年 7 月 25 日 群馬県生まれ
1975 年 3 月 東京大学文学部哲学科卒業
1980 年 3 月 同大学院人文科学研究科哲学専修課程博士課程修了
1980 年 4 月 東京大学文学部助手
1981 年 4 月 南山大学文学部講師
1984 年 4 月 南山大学文学部助教授
1983 年 7 月～1985 年 9 月 ケンブリッジ大学古典学部 Visiting Scholar, ロビンソン・カレッジ Visitor, Bye-fellow
1989 年 4 月 東京工業大学工学部助教授
1996 年 4 月 東京工業大学大学院社会理工学研究科教授
2002 年 5 月～2003 年 6 月 フランス政府招聘によるフランス国立社会科学高等研究院客員教授
学位 博士（文学）（東京大学 1993 年）
研究テーマ：
環境・生命・情報などの問題にかかわる価値の対立、争論、紛争を分析し、合意形成プロセスの理論的基礎を明らかにするとともに、実践的に応用するための手法を開発すること、さらに、この課題を実現するために、日本・東洋・西洋の思想を問題解決のための知的資源として活用することを課題としている。主要著作は、『環境の哲学』『感性の哲学』『西行の風景』『理想と決断』など。

日本オフィス学会「オフィス文化論研究部会」

株式会社オフィスビル総合研究所「和魂洋才のオフィス研究会」

合同講演会 講演録 （2004 年 11 月 9 日 品川コクヨホール）

「感性の哲学」

コミュニケーション空間のデザイン技法

講師：哲学者 **桑子敏雄氏** 東京工業大学大学院 社会理工学研究科 教授

もくじ

1. 感性的空間の意味 1
 オフィスとは、いうなれば人と人とのコミュニケーションを図る空間です。ですから、その空間を人がどう捉えるか、どのような感性を持って接するかということについて知るの、非常に大切なのではないのでしょうか。
 - ・ 広重の浮世絵に見る日本的な感性
 - ・ 奥深い世界を表現する日本の絵画
 - ・ 日本人が受け継いできた「空間の履歴」
2. 日本的な合意形成プロセス空間の構築 10
 日本人は長い歴史の中でさまざまな文化を生み、そこから独特の感性を培ってきました。注目したいのが、観察者を引きずり込み、巻き込んでいくような空間づくりです。
 - ・ 日本の空間は人を中に巻き込んでいく
 - ・ 合意を形成するには仕掛けが必要
 - ・ 室町時代の合意形成プロセス
 - ・ 合意形成のための空間デザイン
 - ・ 合意形成プロセスを阻害する要素をなくそう
 - ・ 寄り合いができる空間をもとう
3. 講演会開催の趣旨について 21
 「能率・効率・コスト」規格大量生産システムを標榜した工業化社会のオフィスづくりから、「人」が主役の知識社会における「知的生産の場」としてのオフィスづくりの新しい価値観を「文化」や「日本の伝統」に求めようとする研究活動です。
 - ・ 「オフィス文化論」及び「和魂洋才のオフィス」研究活動の意義

1. 感性的空間の意味

本日は「感性の哲学」というテーマでお話しをさせていただくにあたり、サブタイトルを「コミュニケーション空間のデザイン技法」といたしました。ここにお集まりのみなさんはオフィス関係の仕事をされているそうですが、オフィスとは、いうなれば人と人とがビジネスのための創造的なコミュニケーションを図る空間です。ですから、その空間を人がどう捉えるか、どのような感性をもって接するかということについて知るのは、非常に大切なのではないのでしょうか。

今、いろいろな方面で、人と人のコミュニケーションをどう推進していくかが課題になっています。私自身、コミュニケーションと空間の関係を長いあいだ考え続けてきました。そしてそのポイントのひとつとして、やはり感性が重要になってくると気づいたのです。

人々は、それぞれのもつ歴史的な背景、これを私は「履歴」と呼んでいます。この履歴によって培われた歴史的な感性に基づいて空間を捉え、そこからの影響を受けるのです。

私は自分の著書『感性の哲学』（NHKブックス）の中でこう書きました。

「人がどれほど豊かな空間で人生を送ったかということは、その人の人生がどれほど豊かであったかということと不可分である」

つまり、空間の問題と、そこで時間を過ごす人の生き方とは、深い関係にあるのですね。

したがって、私たちが空間を構築するときには、そこを利用する人の感性を大事にしなければいけません。特に、コミュニケーションを促進するオフィス空間において、その点は非常に重要でしょう。

それでは、私たち日本人が空間と接するとき、そこにどんな感性が発揮されているのでしょうか？

それを知るために、最初にいくつかの絵をご覧くださいましょう。

■ 広重の浮世絵に見る日本的な感性

この浮世絵は、歌川広重の「名所江戸百景」にある『浅草田甫西の町詣』です。

昨年5月、私はフランスの高等社会学研究院に客員教員として招かれ、「風景」の問題を論じるなかで、日本的な空間と日本人の感性の関係性についての話をしました。そのとき、受講生にいくつかの絵を見ていただいたのですが、もっとも反響があったのがこの1枚です。

広重の晩年の作品には、江戸的な感性、つまり「いき」の世界が見事に表現されています。タイトルからもわかるように、描かれているのは、部屋の窓から眺めた当時の浅草ののどかな田園風景です。一見するとただの日常のワンシーンに過ぎないのですが、実はこの中にさまざまな謎掛けが潜んでいるのですね。

ここに描かれているものは風景だけかということそうではありません。じつはこの風景を見る人の目も描かれているのです。また、画家の視点も描かれていますし、その広重の視点を通して、私たちは江戸の人々の心まで知ることができる。それを解くために、描かれているものをひとつずつ整理していきましょう。



歌川広重の「名所江戸百景」
『浅草田甫西の町詣』

まず中央付近に見えるのは富士山です。夕焼けの空には鳥が飛んでいます。部屋には格子窓があり、障子があって、左に少しふすまが見えます。それから、猫がいて、窓際に手ぬぐいが掛かり、横に湯飲み茶碗。窓の下には雀の絵が描かれています。ふくら雀ですね。そして畳が敷かれ、上に何かよくわからないものが置かれています。

もう一度、窓の外に目を転じますと、田圃と農家があり、わかりにくいかもしれませんが、遠くに小さく畦道を歩く人の列が見えます。ここを拡大しますと、多くの人が熊手を手に持っていますから、どうやら酉の市から帰ってくるところのようです。したがって、

11月の風景になります。

さて、これらの構成要素を読み解いていくと、どのような情景が浮かんでくるのでしょうか。

場所は浅草で、しかも部屋の構造から、ここが遊郭の一室だとわかります。湯上がりの客が手ぬぐいを窓辺に置き、飲みかけのお茶を窓際に残して、部屋の奥にいる。

ここで重要な意味をもってくるのが、畳の上に小さく描かれているものです。これは熊手をデザインした「かんざし」のセットなのですが、外を歩く人の行列と合わせて考えると、この部屋に立ち寄っている男性が、酉の市に行って、この部屋の女性のために買ってきたおみやげではないかと想像できます。

熊手のかんざしはセットになっていますが、そのなかの一本だけが引き出されている。つまり、男性は女性のためにその一本をためしに髪に挿してあげたのです。

2人はおみやげを開きながら、酉の市についてもひとしきり話をしたにちがいない。そこから、この部屋が男女の親密な空間であることがわかってきます。

もちろん、絵の中には男女の姿は描かれていません。けれども、広重は彼らの目を借り、2人が目にしている浅草の風景を描くことで、その関係性までも見事に表現しているのです。

謎掛けはそれだけではありません。

窓のところに、そんな男女の姿を見て見ぬ振りをする猫がいます。猫は「招き猫」になっていることでもわかるように、日本では客を引き寄せると信じられている動物です。さらに「酉の市」の「とり」も「客をとる」にかけてあります。

いうまでもなく猫と酉の市の熊手は、お金や幸せをかき寄せることの象徴です。それから、壁に描かれている雀は「ふくら雀」という吉祥紋でして、遠くに見える富士山も代表的な「おめでたい図」ですから、この絵は、もう、めでたさであふれています。

すべてのものがさりげなく、控えめに描かれています。これこそでしゃばることのない、「いき」の感性的表現です。

このように謎掛けを読み解き、情景を理解できるようになると、風景がまったく違った意味をもったものに見えてきます。「情景」を捉える心、これもまた感性ですが、感性を発揮することで、私たちは空間のもつ意味に迫ることができるのです。

■奥深い世界を表現する日本の絵画

広重の浮世絵は、その中に描かれていない奥深い意味を組み込むかたちで構成されています。ですから、見る人は作者の投げかける謎掛けに應えていかなければなりません。このような表現の技法は、近代の西洋絵画とは異なり、まさに日本人の感性に基づくものなのです。

実をいえば、江戸時代の浮世絵師たちの多くも、西洋から伝わった遠近法を学び、多用しています。広重の絵にもこの技法がたびたび使われているのです。

たとえば「名所江戸百景」の『四ツ谷内藤新宿』を見てください。



歌川広重の「名所江戸百景」
『四ツ谷内藤新宿』

ここでは、近くにいる馬を大きく描いていますし、そして左の町並みを見ていただければわかるように明らかに遠近法を採用しています。

ところが、広重の表現はそこに留まっていません。ある程度の距離をもって家並み遠近法で描けば、こんな風にそれらしく見えるが、近くにいる馬を遠近法で描けば、こんな風に見えてしまうぞ、という遊びです。

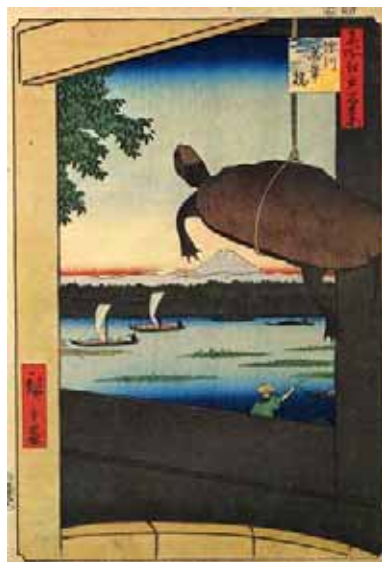
では、馬の存在に対する空間の表現はどう考えたらいいかというと、ご存じの通り、馬というのは歩きながらも頻繁に「落としもの」をします。ですから、そばに寄るとけっこう匂うんですね。この絵で広重は、馬の脚と、その「落としもの」まで大きく描くことで、見る人に匂いすら感じさせようとしているのです。

つまり広重は、遠近法を用いながら、「距離を知覚するのは視覚だけではなく、嗅覚もまた空間知覚の重要な能力だ」と言っているのです。しかも、その嗅覚の存在を絵のなかで描く、つまり視覚によって嗅覚による空間知覚を描いているのです。

3枚目は同じシリーズの『亀戸梅屋舗』です。これはゴッホが模写したことで有名な浮世絵ですが、ここでも広重は『四ツ谷内藤新宿』と同様に大胆な構図で、開きはじめて梅の花の香りを感じさせようとしています。



歌川広重の「名所江戸百景」『亀戸梅屋舗』



歌川広重の「名所江戸百景」『深川萬年橋』

広重の作品では、もう1枚、これも名所江戸百景の中から『深川萬年橋』を見てみましょう。この絵も多くの謎掛けに満ちています。

まず目に付くのは「浅草田圃西の町詣で」でも描かれた富士山です。深川からの風景ですから、富士山の手前に見えるのは丹沢の山々でしょう。そのこちらには、大川、つまり隅田川が流れています。そこに帆かけ船が2艘。さらに、隠れていますが手前にももう1艘、船と船頭が描かれています。

そして中央に、つり下げられた1匹の亀。この亀が富士山を抱きかかえるように描かれているところが重要なポイントです。

先ほど言いましたように、霊峰富士は吉祥であり、おめでたいもののシンボルです。また亀も同じです。「鶴は千年、亀は万年」といい、長寿の象徴になっていますからね。

ちなみにタイトルにある「深川萬年橋」とは、万年も落ちないように丈夫な橋であってほしいという願いを込めた命名によるものです。したがって広重は、その名称と掛けて「亀」を描いたのです。

ただし、その亀は、ここでは縛られています。一見、かわいそうな光景であり、なぜ、おめでたい亀を縛ったのか、みなさんは不思議に思うかもしれません。

しかし、よく見てください。

亀は縛られながらも、決して首をうなだれてはいないことがわかるでしょう。希望に燃えるように空を見上げ、遠くを、あたかも富士山を見上げています。どうしてなのでしょう？

ここで亀のまわりの枠のようなものに注目してください。上下と左手に描かれているのは手桶で、亀はその取っ手の部分に吊り下げられていることがわかります。

深川萬年橋の近くには深川八幡という神社があります。八幡神というのは武士の神様として有名ですから、江戸時代は非常に賑わっていました。いうまでもなく武士は殺生をします。その償いに、八幡神社ではしばしば放生会という催しを行うのです。

生き物を池や川に放つことで殺生の罪をあがなうという宗教行事は、当時はすでに一般的に広がり、武士でなくてもお祭りのときに買った亀や鯉を放流する習慣が根付いていました。

つまりこの亀は、放生会のために萬年橋の上で売られているのです。だから手桶の取っ手につり下げられているし、手桶のなかには鯉もいるはずです。そしてこれから隅田川に放流されるところだということがわかります。

亀もそれがわかるのでしょうか。もうすぐ自由になるからこそ、希望に燃えたように首を持ちあげ、遠くをみつめている。

ここでもうひとつ、みなさんは、絵に描かれた風景が非常に低い視点からのものであることに注目してください。手桶の取っ手の下から隅田川や富士山を臨む構図になっているのは、この絵が子供の視点から風景を描いているからなのです。

おそらく、万年橋で売られている亀と鯉をのぞき込んだこどもが親に「買って！」とおねだりしたのでしょう。

子供ですから、そんな光景をしゃがみながら眺めています。そのとき、亀がまるで富士山を抱いているような格好であることに気づき、小さな亀が大きな富士山を抱いていることのおもしろさに気づくのです。思わず声をあげたかもしれない。それを聞き、そばにいる両親も「どれどれ……」しゃがみ込んで、子供と同じ風景を見る。

江戸の風景の取材に通りがかった広重も同じようにのぞき込む。そして、これは絵になるぞと思う。

すばらしいのは、広重のおかげで、そんな情景を、私たちも今、この1枚の浮世絵を通して味わっているという点です。江戸時代の人々が共有した視点をわたしたちも楽しんでいる。広重というひとりの浮世絵師の力によって、さまざまな人が一つの視点を共有している。しかもそこに、多数の視線が重なり合わさっている、にぎわっている。わたしが「視点の共有・視線のにぎわい」というのはこのことを言いたいのです。

このように、風景というのは、いろいろな人がいろいろな思いをもちながら見ることができるものです。そして同じシーンでも、見る人の背負っている背景や、そこから生まれる経験によって意味が違ってくる。

ところで、ここには、じつは鶴も描かれているのですが、わかりますか。

そう、亀が吊られていますよね。つまり「ツルカメ」。ここには鶴亀が揃っていて、おめでたさにあふれているというわけです。

こうやってさまざまなしかけを工夫することで、風景を見る目の中に、人と、人の営みを組み込んでいく。風景というのは、人と空間、あるいは人と自然との、相互のかかわりあいの中で見えてくるものだ、そして、風景を見る目というものを、広重は作品のなかに描き込みました。

この絵が描かれた時代と今とでは、かなりの時間的な隔たりがあります。しかし私たちは、作者の投げかけた謎を解いていくことで、十分に共感できる。そこには共通した感性があるからなのです。

視線を共有し、まなざしを寄せあうと、同じ風景が意味をもち、豊かさを増していくのです。同時に、風景を見る人々の心も豊かになっていく。

「視点の共有・視線のにぎわい」は、空間と人との密接な関係性にあることを示しています。

■日本人が受け継いできた「空間の履歴」

このように、ひとつの風景に潜むさまざまな背景を探っていくと、それが単に目に見えるものだけではなく、長い歴史の中で培われた感性に基づいて描かれたものであることに気がつきます。したがって、私たちのほうも感性をもって空間に接することで、バックグラウンドにある歴史の重みに触れられるのです。

このような空間のもつ歴史性を、私は「空間の履歴」と表現し、それを捉える能力を「歴史的感性」と呼んでいます。

ここでなぜ「空間の歴史」ではなく履歴なのかといいますと、歴史はあくまで過去を物語るものに過ぎないからです。つまり歴史とは過去に属するものです。これに対して、履歴は現在に属しています。過去の出来事が蓄積されたものが履歴になるからです。

空間の履歴とは、その空間に生じた出来事が事実として記録され、蓄積されている結果なのです。

それでは、私たち日本人が好ましいと思う風景には、どんな「空間の履歴」が含まれているのでしょうか。

ここでもう少し歴史を遡り、室町時代に狩野元信が描いた「富士参詣曼荼羅図」を見てください。



狩野元信
『富士参詣曼荼羅図』

曼陀羅とは仏教の教えをグラフィカルに表現したのですが、日本人はそこにもう少し広い世界を描こうとしてきました。

注意して見ていただくとわかりますが、この絵の富士山は頂上が3つに分かれています。そしてその三峯には小さな仏像、薬師如来、阿弥陀如来、千手千眼観音が描かれている。

仏は、本来はインドにいらっしゃるのですが、ここでは神のかたちとなって現れ、人々を救済しようとしています。だからこそ、この絵のテーマである富士山への参詣とは、神

社へのお参りであると同時に、仏様を訪ねる行為でもあるのです。

このような考え方を「神仏習合思想」、とくに「本地垂迹思想」と呼び、奈良時代から江戸時代まで、ずっと日本人の信仰を支配してきました。

神仏習合思想は、神道と仏教を融合したもので、まさに日本的な考え方や、物の見方のベースになっています。

たとえば、先ほどの富士山の上に描かれていた千手千眼観音。神仏習合思想のひとつの象徴でもある菩薩は、名前の通り千の手と千の眼をもっています。これは、人々にはいろんな思いがあり、苦しみも千差万別なのだから、多様なまなざしによってそれを見抜き、多様な対応手段によって救済しようという発想から生まれたものです。

つまり、何かを見るときには複数の視点が欠かせない。複数の視点をもつことで、同じことを多角的に捉えることができる。

お気づきでしょうが、これはまさに、広重の浮世絵の描き方に通じる考え方なのです。

江戸時代の風景の捉え方には、それまでの日本人の感性の歴史が反映され、空間の履歴として表現されている。この点に私たちは着目しなければなりません。

現代に生きる私たちも、同じように空間の履歴を感じながら風景を見えています。なぜなら、私たちは歴史から切り離されて生きることはできないからです。

そしてその歴史の積み重ねが「履歴」となって現在に属し、やがて未来につながっていく。

ここで大事ななのは、歴史は決してつくってはいけないということです。あくまで履歴の中から掘り起こしていかなければなりません。

これが物語であれば、ねつ造してもかまわないのです。歴史小説は話をおもしろくするためにさまざまなアレンジを加えます。しかしそれは物語だから、小説だから許されることです。

詐称された履歴は履歴ではありません。だからこそ私たちは、過去に日本人が培ってきた空間への感性を尊重し、そこから現代の空間をつくっていく必要がある。

2. 日本的な合意形成プロセス空間の構築

■日本の空間は人を中心に巻き込んでいく

日本人は長い歴史の中でさまざまな文化を生み、そこから独特の感性を培ってきました。多様な視点の活用はまさにそのひとつですが、もうひとつ注目したいのが、観察者を引き込み、巻き込んでいくような空間づくりです。これも日本の伝統的な文化といえるでしょう。

たとえば江戸時代初期の板本『法然上人行状絵図』の中の挿絵を見てください。

ここに描かれているのは柱と梁と床板、そして3枚の丸い座布団でしかありません。実にシンプルな絵です。



『法然上人行状絵図』

作者は遠近法を使っていません。ですから、本来なら距離感は表現しきれないはずなのですが、私たちはこの絵を前にすると、決してそうは思わない。自分と、描かれている風景との関係性をちゃんと把握できるのですね。

その理由は座布団です。1枚が柱の向こうに描かれていることで、見る者がこちら側の「部屋の外」にいることを認知させてくれます。

この絵がすばらしいのは、純粹に事物の配置だけによって空間を描くことで、観察者の身体的配置までも風景の中に組み込み、描写された空間に巻き込んでしまっているところです。同じような表現手法は、日本の多くの絵画に使われています。

長谷川等伯の『松林図』では、霧の中から松の幹と梢の重なりが現れ、背景に雪山が広がっています。しかもそれは奥行きをもっている。向うに広がる空間が、松の枝と霧の重なり合いによって見事に表現されているのです。



長谷川等伯の『松林図』

1枚の絵の中に「重なった手前」と「向こう側」があるのは、いうまでもなく観察者の配置を考慮しているからです。そして見る人は、作者の意図した配置の知覚が、やがて空間の知覚と一体になることに気づく。そのとき、まるで霧が自分のほうに迫ってくるのを感じるでしょう。その結果、観察者は絵に描かれた空間の中に巻き込まれてしまうのです。

■合意を形成するには仕掛けが必要

私は今、この「空間の中に人を巻き込んでしまう」という空間の構築方法に注目しています。

と、いいますのは、最近、公共事業に関連した住民参加集会のお手伝いをさせていただく機会が多く、そのたびに、どうしたら多くの人々の心をひとつにし、合意を形成できるかを考えて続けているからです。

合意形成とはコミュニケーションの最終形態であると思いますが、みんなが納得してひとつの結論に至るのは、決して簡単なことではありません。もともと違う意見を持ち、生まれ育った環境も異なる人たちをまとめるには、そこに何らかの装置が必要になる。そこで、人を巻き込む空間の力を利用できないかと考えました。

もちろん、そこに至るまでには多くの試行錯誤があったのです。

最近では日本でも、ダム建設などの計画づくりの段階で、住民参加型の意見交換会が頻繁に行われるようになっていきます。

ところが、その多くが、住民の合意を得るところか、賛成派と反対派の紛糾によって終わってしまい、何の実りも生み出さない結果に終わっています。かえって対立の溝を深めてしまい、集会そのものの意味をなさないので。

その理由は徐々にわかってきました。P I というアメリカ流の方法で集会を運営しようという努力がありますが、輸入したスタイルで行おうとしていた。それではうまくいくはずがありません。なぜなら、コミュニケーションをとる方法が、日本人とアメリカ人とでは同じではないからです。

私は住民参加集会の企画を任されるにあたって、いろいろ考えました。

日本人にとって納得したうえで合意形成ができるようなコミュニケーションの方法とはどんなものか？ そのためにはどんな場をデザインすればいいのか？

思いついたのが、室町時代の文化に学べないかといったヒントだったのです。

■室町時代の合意形成プロセス

南北朝から室町時代にかけては、日本の社会がいちばん分権的だった時代です。群雄割拠に至る戦国時代に突入する直前、国中に守護大名が点在し、領地を治めていました。しかし彼らの政治的な力は弱かったので、集落や村落、あるいは都市では、地域の住民たちが自分たちのことは自分たちで決めるという仕組みをつくっていたのです。堺のような自治都市はどの代表ですね。

そういう仕組みの中で頻繁に行われたのが「寄り合い」です。その寄り合いの場所としてもっとも有名なのが、慈照寺、つまり銀閣寺にあります同仁斎という四畳半の部屋なのです。



対等平等な討議空間
慈照寺東求堂同仁斎

同仁斎は日本の茶室の起原であり、書院づくりの起原ともなった部屋だといわれています。ここで、政治的には無能であると言われた将軍、足利義政が、同朋衆といって芸術的に優秀な、センスのある人たちを集め、お茶やお花や歌を始めたのです。つまり芸術的なことについて議論した、寄り合いの場だったのです。そこから、茶の湯や生け花、香道、連歌といった、今日にも続く日本を代表する文化が発信されていきました。

この「同仁斎」という名前は、中国の「一視同仁」という言葉から来ていて、「この部屋に入った人はみんな平等ですよ」という意味を示しています。つまりここに集まったからには将軍も平民もない、みんな対等の立場で意見を言い合ってくださいと生まれたのが、この部屋なのです。

同朋衆と言われている人たちの中には庭師もいましたし、そのほか芸能を生業としていた人たちも大勢加わっていました。当時の社会階層でいえば、いちばん身分の低い人たちです。

そういう人たちを抜擢し、将軍と対等な立場で議論をする空間をつくったという点では、

画期的でしょう。

しかも同仁齋が興味深いのは、名前の示す思想だけではありません。ここから生まれた文化そのものが、現代でも通じる合意形成のプロセスに欠かせないツールをつくってきたのです。

たとえば茶の湯です。

人々が集っても、すぐには肝心の話題には触れない。まず主人の点てる茶を楽しみ、さらに茶碗を愛でたり、飾ってある掛け軸について語り合ったりしてワンクッションを置きます。そうすることで、次に続く話し合いがスムーズに進むのですね。

花を生けたり、歌を詠んだりするのも同じでしょう。

もともと人は異なる意見や考え方をもって集まるのだから、そこでいきなりお互いをぶつけあっては合意など生まれない。しかし、お茶や花、歌といった楽しみを共有するといったプロセスを経ることで、歩み寄りが生まれ、合意を形成できる可能性は高まるのです。

これはまさに、対立と紛争の時代である室町時代だからこそ生まれた文化でしょう。

集会や議会でなく、「寄り合い」という言葉を使う意味も同じです。

そしてそんな寄り合いをうまく成功させる工夫は、その当時、庶民のあいだでも行われていたのです。

琵琶湖の北に菅浦という小さな集落があります。ここは南北朝時代から続く古い村なのですが、そのころから決めごとは村民すべての話し合い、つまり寄り合いによって行うという自治村落としての伝統がありました。おもしろいのは、その寄り合いにさまざまなしきたりがあることですね。

たとえばそこにはこんなきまりがあるということです。

- ・ 多数決はとらない

合意とは全員が納得したうえの結論なので、多数が少数を押さえ込むような決議の方法は集落の分裂を招くことになります。このため、決めごとはあくまで話し合いのうえ、全員の総意として進められるのです。

- ・ 決めたことに対して、あとから「自分は反対だった」とは言わない

寄り合いは原則として村民全員が集まり、合議の結果として結論を出すのですから、そこに参加した以上、合意には従い、あとから反対意見を蒸し返すのはルール違反です。それを許すと、やはり集落が分裂してしまうからです。

- ・ 代理出席は認めない

これを許すと、代理は住民を代表していることにこだわり、譲歩することがない。そうすると歩み寄り生まれません。もしどうしても出席できない人がいれば、その人は発言権を失い、しかも合意に従うことが求められるのです。

- ・書類はすべて保存する

話し合いで決まったことや、よその集落とのトラブルなど問題解決の経緯はすべて文書化し、永久に保存します。膨大なドキュメント、つまり事実をもつことで、その後の話し合いを上手に進めることができます。

この集落では、今でも昔からの寄り合いのシステムを守っています。しかもそのときは、私利私欲に基づかない公の立場で議論しなければなりません。

ちなみに、この集落で育った人たちは、他の地域で集会などに行くと、「どうしてこの人たちは自分自身のことしか考えないんだろう？ 私利私欲ばかりで発言しているんだろう？」と不思議に思うそうです。

それを考えても、室町時代に生まれた寄り合い式の合意形成プロセスは今でも充分に通用するし、そして私たちにとっても学ぶ価値のあるものだと思うのです。

■合意形成のための空間デザイン

それでは、私は実際にどうやって、日本で伝統的な合意形成のプロセスを、現在の住民参加集会に活かして来たのかお話ししましょう。

一例としてあげさせていただくのは、木津川のダム建設に関するケースです。

木津川は淀川の上流にあたる部分で、水没予定地の住民の移転は完了し、道路の付け替えも完成間近です。しかし、もう一度住民の意見をきちんと聞くべきだということになり、木津川上流河川事務所の依頼でわたしが進行役として集会を企画しました。当然、そのエリアには建設賛成派も反対派もいますから、従来のような行政指導型の話し合いとは異なったやり方が求められたのです。そこで、誰か中立的な立場の進行役が必要になり、私に声がかかったのです。

このような状況で多くの住民を集め、住民意見の集約のための合意を形成するために、私はいろいろなことを考えました。会議の進行のしかたについてはもちろんですが、それだけでなく空間のデザイン、たとえば椅子はどう配置するかといったことから、お茶やお菓子はどうすればいいのか……といったことまで、細かく検討を重ねたのです。

そして参考ににしたのが、室町時代の合意形成のプロセスです。

住民参加集会は多数決で結論を出す場ではなく、あくまで対話集会としてお互いを理解する機会とする。質疑応答や交流会、ワークショップなどの方法で、寄り合いのプロセスを演出しました。

さらに参加を促すポスターとちらしにも、その考え方を反映させています。



ポスター対話集会ふるさとの川
木津川上流を考える
話し合いに参加しませんか

通常の住民参加集会の告知では、テーマと場所や時間だけを示す紋切り型の案内になりがちですが、それでは最初から対立を煽ってしまいます。したがって私たちは、「ふるさと

の川 木津川上流を考える話しあいに参加しませんか」というやわらかい表現で、だれにでも気軽に参加してもらえるように呼びかけたのです。ダム建設の是非をいきなり問うようなかたちではなく、「みんなの生活に関わることなのだから、寄り集まって話をしようよ」というスタンスですね。このため、中学生、高校生にも参加してもらえるように告知しました。開かれた集会であることも強調したのです。

第一回目の集会には 200 人近い参加者がありました。ただ、そこには当然、反対派も賛成派もいますから、かなりの人は目がつり上がっていて、険しい雰囲気だったのですね。

私たちはまず会場のセッティングを、従来のような行政側が一方的に説明し、質疑応答する教室のようなかたちにはせず、全員が対等な立場になる配置にしました。また、話し合いの前にワンクッション置いてもらえるように、住民に共通なテーマに関するいくつかの展示も行っています。

集会の場では、いきなり意見をぶつけあうのではなく、木津川についての問題点の指摘、その解決策の提案、集会の進め方についての意見、さらに、ダム問題に対してどう考えているについて、付箋に書いてもらい、それを整理しました。

木津川のプロジェクトでは全部で 6 回の場を設けて、住民の総意としての行政に対する「提案書」の提出までこぎつけました。

空間とは建物の構造的なものだけでなく、中にいる人の配置や、先ほど説明したような花などの展示物、そして会議の進行の仕方まで、すべて含めて構築されます。ですから、そこで何をするか、その目的に従ってデザインしなければなりません。

そのとき、参考にできるヒントは、実は私たち日本人がもっている歴史的背景、つまり履歴の中にたくさんあります。そしてそれを上手に活用することで、固有の感性に働き、いい結果をもたらすのです。

■合意形成プロセスを阻害する要素をなくそう

もうひとつ、合意形成プロセスを構築し、コミュニケーションを促進するためのコツをお話ししておきましょう。

日本には、合意を阻害するような原因について表している言葉がたくさんあります。並べてみましょう。

- ・寝耳に水 ・ボタンの掛け違い ・蚊帳の外 ・藪の中
- ・平行線 ・水掛け論 ・蒸し返し ・どうどうめぐり ・振り出し
- ・寝た子を起こすな ・なあなあ ・なくすし ・アリバイづくり
- ・お墨付き ・ご用会議 ・ご用学者 ・はじめに計画ありき、結論ありき
- ・抱き込み、囲い込み ・横やり ・やり玉 ・ゴリ押し ・まるめこみ
- ・鶴の一声 ・天の声 ・見切り発車

どれも聞いたことがあるはずです。そして会社の会議などでこれらのことが原因になり、納得できる結果にならなかった記憶もあるはずです。

ということは、せっかく私たちの祖先がこれだけの言葉を残してくれたのですから、逆にその阻害要因を取り払ってしまえばいい。

たとえば、「寝耳に水」でいきなり結論を伝えてしまったら、誰もが反発するのですから、そうならないように事前に情報を伝えておく。「蚊帳の外」にならないように関係者全員から意見を聞けるような場を設ける。全員が納得しない段階で「見切り発車」はしない。

……などなど、これらをひとつずつ潰していくだけでも、十分に合意形成のプロセスは構築できるのです。

■寄り合いができる空間をもとう

それでは、ここまでの話をもとに、オフィスのようなコミュニケーション空間をつくっていくのにどんな工夫をしたらいいか、考えてみましょう。

日本的なコミュニケーション空間とは、直接的に意見をぶつけあう場ではなく、出会いから話し合いに至る「寄り合い」のプロセスを実行できる場所だと思います。そこで必要なのは、コミュニケーションを間接化する装置です。

たとえば室町時代に、お茶や花、歌などにとる間接的なコミュニケーションを重視したように、会議室に何かしらのアイテムを置くだけで、雰囲気はずいぶん変わってしまうでしょう。会議とは、無機質な空間で話し合うだけのイベントではないのです。

また進行において、ビジュアルコミュニケーションの多用は有効です。視覚情報を軸に話を展開していくことで、会議の参加者の視野が広がり、そこから歩み寄りも生まれます。

さらに、「同仁斎」で実現されたような平等で対等な創造的空間の構築は非常に大切です。せっかくある空間と時間を共有するのですから、そこではお互いが対等な立場で考えを発表し、聞き合う。出た意見はすべて書き出し、平等に論議の対象にします。

最後に、感性に感ずる私の考えをまとめておきます。

- ・感性とは自己と環境との関係を捉える能力である。
- ・自己は空間のうちに配置をもって存在する。
- ・身体的自己と関係する諸事物や人びとの全体が環境を構成する。
- ・身体的自己へ出現する空間の相貌が風景である。
- ・人間は歴史的時間のなかで空間と自己の関係を創造することができる。
- ・空間と人間の創造的関係は、固定化したコンセプトによるのではなく、多様なまなざしのにぎわいと視点の共有によって実現する。
- ・「視点の共有とまなざしのにぎわい」が合意形成の必要性を説明する。
- ・視点の共有とまなざしのにぎわいを実現するのがコミュニケーション技法とコミュニケーション空間のデザイン技法である。
- ・合意形成の手法とは、コミュニケーションの技法とコミュニケーション空間デザインの技法の統合である。
- ・コミュニケーション技法とコミュニケーション空間デザインの技法の開発によって日本文化は一大宝庫である。

私たちはそれぞれの感性によって環境との関係を捉えます。したがって、同じデザインの空間であっても、受けとり方は同じではありません。だからこそ、「この空間はこうである」といった一元的なものの見方はせず、多様なまなざしによって、多くの人が創造性を発揮できるようなデザインを考えていかなければなりません。

そしてそのために有効なのが、視点を共有し、視線のにぎわいを実現できるまざまな工夫なのです。そのために日本文化から学べるものはたくさんあります。

日本では、花や掛け軸を飾るといった工夫だけで室内の雰囲気を一変させるような文化を築いてきました。そのベースにあるのは、空間は工夫しだいで多様な意味空間に変貌するということです。そして、その多様性に対応できるのが感性なのです。

オフィスのような空間をつくる时候にも、このような日本文化の遺産を活用しない手はありません。豊かな空間を提供し、そこに集まる人々の精神を豊かにしていく創造的な力が感性なのです。

「効率やコスト」ばかりを優先する 20 世紀は終わりました。21 世紀は感性の時代であるといわれ、人々はもっと精神的な豊かさを必要としていきます。そんな時代だからこそ、感性を磨くことが重要になってくるのです。

3. 講演会開催の趣旨について

■「オフィス文化論」及び「和魂洋才のオフィス」研究活動の意義

「能率・効率・コスト」規格大量生産システムを標榜した工業化社会のオフィスづくりから、「人」が主役の知識社会における「知的生産の場」としてのオフィスづくりの新しい価値観を「文化」や「日本の伝統」に求めようとする研究活動です。

文化とは・・・

- ・権力や刑罰を用いなくて導き教えること
- ・社会を構成する人々によって、習得・共有・伝達される行動様式ないし生活様式の総体
- ・それぞれの人間集団は個別の文化をもち、個別文化はそれぞれ独自の価値をもっていて、その間に高低・優劣の差はない
- ・カルチャー（culture）文化・教養・知識と訳される
- ・学問・芸術・宗教・道徳など、主として精神的活動から生みだされたもの
- ・世の中が開け進み、生活が快適で便利になること

文化を定義するこれらのさまざまなことばから、「人間社会における価値と価値観にかかわる事柄」をその定義として抽出してみました。

桑子先生は、その価値や価値観にかかわる能力を「感性」と位置づけ、また、「それらの感性は日本の伝統文化に秘められている」としたお話をうかがうことができ、それぞれの研究活動に有意義なご示唆をいただけたものと思います。

一言でいえば、感性とは、「環境の変動を感知し、それに対応し、また自己のあり方を創造してゆく、価値にかかわる能力」である。

「感性の哲学」桑子敏雄著 はじめにより

また、より豊かなオフィス空間づくりのための研究活動に、勇気を与えてくださった桑子先生からの冒頭のメッセージを、あらためてかみしめてみたいと思います。

「人がどれほど豊かな空間で人生を送ったかということは、その人の人生がどれほど豊かであったかということと不可分である」

「感性の哲学」桑子敏雄著 第三章 歴史的感性より

「オフィス文化論研究部会」 日本オフィス学会

◇研究部会の目的

オフィスの主役である「人」側からオフィスの在り方論を組み立て、オフィス家具、IT、インテリア、オフィスパイルなどのハード側は言うに及ばず、オフィスの運営やワークスタイルなどのあるべき姿の追求に寄与する。

「能率・効率・コスト」規格大量生産システムを標榜した工業化社会のオフィスづくりから、知識社会における「知的生産の場」としてのオフィスづくりのあるべき姿の研究・提言を行う。

部会長：仲 隆介（京都工芸繊維大学 デザイン経営工学科 助教授）

幹 事：川田文郎（コクヨ株式会社 常務取締役）

本田広昭（株式会社オフィスパイル総合研究所 代表取締役）



「和魂洋才のオフィス研究会」 オフィスパイル総合研究所

◇研究会の目的：和の魂でオフィス空間を見直し、より心地よくより豊かな生活空間に！

わが国のオフィス空間は、使用者が決まらないうちに標準内装が施工され、それは、決して洋でもなく和でもない無個性の内装仕様がオフィス空間とされてきた。そうした中近年、建物内装の自由度の高まりを好機ととらえて、オフィス空間の“和魂洋才”を問いかける。

“日本的なオフィス空間”を問うことであり、例えば精神的な面では、「もてなし」をキーワードとしたオフィスづくりや、空間活用という点では、屏風や襖、引き戸など古来の合理的な機能性が挙げられる。畳や障子、土壁、木質といった気候風土に適した素材や靴を脱ぐ生活文化などの視点から、より心地よくより豊かな生活の場として、日本人として誇りの持てるオフィス空間づくりの研究・提言を行う。

☆和魂洋才：日本人固有の精神をもって西洋伝来の学問・知識を取捨・活用するという行き方。

主宰：本田広昭（株式会社オフィスパイル総合研究所 代表取締役）



講演会開催の趣旨について（本田広昭 株式会社オフィスパイル総合研究所 代表取締役）

<http://www.officesoken.com>